

『近代日本の社会科学』をめぐって

寺 出 道 雄

(1) はじめに

1 昨 2008 年 7 月、福島大学に、著者であるアンドリュー・バーシェイを迎えて、また私（筆者）自身も参加を許されて、同氏の著書である、

『近代日本の社会科学——宇野弘蔵と丸山真男の射程——』（山田鋭夫訳）NTT 出版、2007 年、
（以下、副題を省略することが多い）

をめぐるシンポジウムが開催された。

同書は、

Andrew E. Barshay, *The Social Sciences in Modern Japan: The Marxian and Modernist Traditions*, University of California Press, 2004.

の邦訳である。

なお、本書の邦訳全体について一言しておけば、バーシェイの英文は、われわれ非英語圏の人間にはかなり難しい。もちろん難しいといっても「何を言いたいのか分からない」といった類の曖昧さがある、というのではない。思考は明快であっても、それが凝縮された個性的な文体で述べられているので、簡単に読みそぐことはできないということである。訳者の山田は、そうした原文を見事に日本語に移している。訳書は、原文がそうであるから日本語の本としても難しい。しかし、しっかりと読めば、著者の思考ははっきりと読者に伝わってくる。

2 ところで、本稿の目的は、バーシェイの著書そのものやシンポジウムに対する感想を述べることである。しかし、筆者自身は、シンポジウム以前にその「書評」（『三田学会雑誌』100 巻 4 号、2008 年 1 月）を公表してしまっている。そして、筆者の『近代日本の社会科学』に対する評価が、シンポジウムによって大きく変わったわけではない。そこで、本稿はその「書評」を一部、若干表現を変えて再現することが中心にならざるをえないことをお断わりしておく。

(2) 『近代日本の社会科学』

1 まず、『近代日本の社会科学——宇野弘蔵と丸山真男の射程——』の構成を目次によって紹介しておこう。

第一章 歴史としての社会科学

第二章 近代日本の社会科学——概観
第三章 二重の過酷——マルクス主義と日本資本主義における過去の現在性
第四章 『資本論』を通して考える——宇野弘蔵とマルクス主義
第五章 学派の終わり？——日本資本主義に直面した宇野派
第六章 社会科学と倫理——市民社会派マルクス主義
第七章 戦後日本における民主主義の構想——政治思想家としての丸山真男
結論

このうち、第三章の主人公は副題からも容易にうかがえないが、それは山田盛太郎である。その点だけを補足すると、本書の視野の広さは、以上の目次からだけでも了解できるであろう。

著者は、日本をドイツ・ロシアとともに、環大西洋からの発展的疎外をこうむった「後発帝国」の諸形態の一つであると定義する。それらの三国は、その産業国家としての後発性のゆえに、社会構造に脆弱性をかかえながらも、国家の独立を維持し、それどころか列強の一員となった。即ち「西洋の中核部への完全な参加者でもなく、中核諸国の植民地でもなく、これら三国は……発展的疎外を共有」(p. 39)した帝国であった。

著者は1890年代からほぼ現代までについて、そうした日本における社会科学とはどのようなものであったのかについて一望しようとする。著者は、環大西洋からの発展的疎外をこうむることによって、日本の社会科学がいかに歪められたかを問うのでなく、そうした発展的疎外という条件に対応して、日本の社会科学が何を成し遂げたのかを確認しようとするのである(第一章)。

2 その場合、著者は、日本の社会科学は、いくつかの相次ぐ契機ないし知的方向性において展開されたとする。

著者は、まず、1890年代までに、君主制の制度と理想化された農村共同体との想像上での結びつきという、いわば新に作り出された伝統に依拠して近代化を達成しようとした「ネオ伝統主義」が形成されたとする。そして、その後の日本の社会科学は、そうした始点としての「ネオ伝統主義」への応答として、戦前においては「自由主義」、「マルクス主義」、そして戦後においては「マルクス主義」に加えて「近代主義」、「近代主義」以降の「成長主義」と「文化主義」という、相次ぐ契機ないし知的方向性において展開されたと概観する(第二章)。

著者の叙述の力点は、1920年代から60年代までのマルクス主義と近代主義の知的伝統におかれる。著者は、マルクス主義と近代主義とに注目することによって、日本の社会科学が、後発帝国という発展の条件の下で達成したものが何であったかを、より詳細に確認しようとするのである。

著者は、講座派マルクス主義の完成者であった山田盛太郎(第三章)と、反講座派マルクス主義の急先鋒であった宇野弘蔵(第四章)という二人のマルクス主義者の対照的な所説を検討する。また、宇野の所説を受け継いだ大内力ら「宇野派」の仕事について(第五章)、さらに山田ら講座派マルクス主義の問題関心を受け継ぎながら、彼らとは別の道をいった、内田義彦や平田清明ら「市民社会派マルクス主義」(第六章)について、検討する。

一方、著者は、同じく山田ら講座派マルクス主義の問題関心を受け継ぎながら、それを非マルクス主義的に展開した所説として近代主義をあげ、その近代主義の代表選手としての丸山真男の仕事

(第七章)について検討する。

そうした本論の展開の後に、著者は結論において、本書での展開を改めて総括する。

以上のごく簡単な紹介からも、この小文で本書の個々の内容に詳しく立ち入って論ずることが不可能であることは容易に理解してもらえらるだろう。そこで、以下では本書におけるマルクス主義の扱いの問題を中心において、大掴みな感想を二三述べよう。

(3) 本書から学んだこと

1 本書全体でしめされ、また明示的には第二章でしめされた、著者による近代日本の社会科学の見取り図についていえば、それは説得的なものである。

まず、強調すれば、その第二章の展開が、思想史ないし学説史を概観するときに陥りがちな、無味乾燥な叙述にはなっていないことである。そこでは、その実質的な形成期である明治の後期からほぼ今日までの日本の社会科学の歩みが、印象的な文章によって簡潔に叙述されている。

もちろん、思想史ないし学説史を概観するときに、ただ一つの「正しい」概観の仕方があるわけではない。しかし、著者による「ネオ伝統主義」、「自由主義」、「マルクス主義」、そして戦後においては「マルクス主義」に加えて「近代主義」、「近代主義」以降の「成長主義」と「文化主義」という契機ないし知的方向性の設定は、過度の単純化に結びつくことなく、日本の社会科学の足跡を簡潔に明らかにしている。

マルクス主義や近代主義の知的影響力が急速に低下していった、1970・80年代以降の視点のみからすれば、他の叙述の枠組みの設定もありえたであろう。だが、大正の末期から昭和の初期にかけての日本では、「社会科学」あるいは「社会思想」といえばただちにマルクス主義のことを意味した。明治以降、戦後の高度経済成長の終焉ののちにいたるまでのそれぞれの時代の日本社会の課題と対応させて、日本の社会科学の歩みを理解しようとするれば、それをマルクス主義を決定的な転回軸の位置において、いくつかの契機ないし知的方向性の展開の過程であるとした著者による叙述の枠組みの設定は、大いに有効であった。

今日マルクス主義について、「失敗した思想」であったとのみ見做されることも多い。そうした中で、パーシェイがその著書で以上のような見取り図の設定を成功させたのは、日本を「後発帝国」の1類型と捉えらるとらえる捉え方であったといえるだろう。

欧米—日本という対照軸のうちで日本を捉えようとする見方は、明治以来、あった。しかし、社会科学的に本格的にその「後発帝国」の性格を究めようとし出したのは、第一次世界大戦後のことであつたと考えてよいであろう。「日本資本主義の成立・確立」の時期を何時ごろと考えるにせよ、遅くとも明治の末には、日本は資本主義の成立・確立をむかえていた。また、日本は国際的な政治・軍事状況においても、ヴェルサイユ条約後の世界体制の中で、日露戦後に獲得した列強の一員としての地位を一層確かなものとしていた。また、関東大震災からの復興は、首都東京を「モダン都市」化してもいった。日本の資本主義化ないし工業化の「一応の」達成を前提として、当時、日本の知識層の中に世界の中での日本の位置づけに関心が高まったのは当然であつた。

1920年代の後半に始まり、30年代の中葉に頂点をなしたマルクス主義者たちの論争——広義の

日本資本主義論争——が単にマルクス主義者を越えた関心と呼んだのは自然であった。

それは、「後発帝国」日本の「遅れ」た側面を、日本の後発性の生んだ文字通りの時間的な「遅れ」とみなすか、「後発帝国」日本に構造的に組み込まれた「遅れ」とみなすなか、をめぐる論戦であった。

——1890年代までの間に、まず「後発帝国」日本の統治システムの合理化の議論として、「ネオ伝統主義」が生まれ、その「ネオ伝統主義」に対する微温的な批判として「自由主義」、そして「ネオ伝統主義」に対するもっともラディカルな批判として「マルクス主義」が生まれた。そして戦後においては、正統派的な「マルクス主義」そのものを「硬直化」したとする立場からの批判として「宇野派」を始めとした、非正統派的なマルクス主義の諸潮流や、社会における個人の主体性の意義をより重視することによって、マルクス主義そのものと区別される「近代主義」が生まれた。——という著者による、日本の社会科学の推移の見取り図自身から、その推移が、「後発帝国」日本それ自身の発展の表現であったとともに、その発展のなかで、現実に対する批判的な個人の自覚を徐々に強めていった日本の知識人が、たどるべくしてたどった道だったことが読みとれるのである。

2 さて、このような本書の中核部分をなす第三章から第七章までについていえば、それらの諸章は、誰かが書くべきであったことがらを著者が書きえたものであるといえる。

というのは、日本の社会科学の「知的英雄時代」（「序文」vi）が、1960年代ないし70年代には終わったということは、誰の目にも明らかだからである。誰かが彼ら「知的英雄」たちへの「哀調」を帯びた「レクイエム」（「序文」vii）を書かねばならなかった。そして、その書き手は「知的英雄」たちA. B. C大先生の「後継者」や、「愛弟子」であってはならなかった。

A先生の「後継者」やB先生の「愛弟子」たちが、「熱い論争」をくりひろげるべき時代もあった。日本の社会科学の「知的英雄」たちの学問は、多分に、その学派の末裔たちによって他の集団に対しては排他的な遺産化、あるいはお家の秘宝化をこうむってきたのである。

そうした点からいえば、1920年代から60年代までの日本のマルクス主義と近代主義の歴史を書く上で、パーシェイは、その著者としてもっとも適任であったといえる。同一の著者が、同一の書物で、山田盛太郎と宇野弘蔵と丸山真男との三人、あるいは宇野派や市民社会派マルクス主義者の見解を、その積極的な面に注視して、一つの知的系譜として紹介・批評したということ自身、一つの「事件」であったとさえいえる。もちろん、本書を読めば、著者が宇野弘蔵と丸山真男——特に丸山——に特別の敬意をいいていることはすぐに分かる。しかし、その敬意は、本書の叙述の客観性を損なうようなものではない。

ここで、特に注目しておきたいことは、著者が「知的英雄」たちの仕事について、「こうした業績を批判することは決定的に必要であるが、しかし少なくとも私からみれば批判するならば、せめて批判対象がもっていた知的水準にもっとしっかり到達すべきなのである。」（「序文」vii）と述べていることである。

山田・宇野・丸山、それに本書にはほぼ名前のみしか登場しないが、大塚久雄といった人々が目指したことは単なる「実証」ではなかった。彼らの仕事の目的は、なお技術的に限定されざるをえない当時の実証の条件のもとで、その豊かな学識を基礎として、それぞれに「自分たちの時代の核心的問題に直面することだったのである。」（「序文」vii）

(4) おわりに

さて、このように、日本において生まれかつ育つべきであったマルクス主義・近代主義の知的影響力も、日本の「経済大国」化にともなって、1970・80年代以降には急速に低下していった。そして、目下、日本を含む世界は、一世紀に一度か二度の経験であると誰もがいう、大不況のただなかにある。

しかし、そうした現状のもとでも、もはや直接に「後発帝国」ではない日本から、「大きな物語」とその語り手が消失してしまったという状況そのものは、いささかも揺らいでいない。こんな時代になっても、混迷する「経済大国」である日本では、『『イデオロギーの終焉』と呼ばれるイデオロギー』(p. 293)が社会を蓋いつくしているようにも見える。

「後発帝国」としての特性を有したがゆえに「知的英雄」達の独自の魅力的な仕事を生み得た日本の社会科学は、日本が直接の「後発帝国」性を完全に脱却しえたがゆえに、もはや独自の社会科学を生む能力をも喪失してしまったのであろうか。そうだとすれば、この間の大きく不可逆な社会変化の中で、日本における社会科学の「知的英雄時代」の再来を望んでも、それは幻想にすぎないのであろう。

—— 筆者は、著者バーシェイが、高度経済成長の終焉後までの、マルクス主義者や近代主義者とそれぞれの時代との切り結び——あるいは対応・対決——を見事に描いてくれただけに、今日の日からすれば、何か彼らの作品が、もはや現代の工匠には作り出すことの出来ない、遠い過去の偉大な名匠達が遺した遺作のようにも見えてしまうのだ。